

Symposium

これからの放射線専門看護師に課せられた役割を考える ——復興支援を受ける現場看護職の立場から——

上澤 紀子

Noriko UEZAWA

公立大学法人福島県立医科大学附属病院 がん放射線療法認定看護師

今回の放射線災害は、看護職に多大な影響をもたらした。むろん二次被ばく医療機関である自施設の看護職者も混乱していた。未経験であり先のことはまったくわからない、自施設の誰もがただ夢中であった。震災直後、われわれは長崎大学大学院放射線専門看護師コース看護師の支援を受けて被ばく医療構築にむけて活動した。この緊急被ばく医療構築を経験して、自身のがん放射線療法看護認定看護師としての役割や責務、そして放射線専門看護師に担ってほしい部分を再確認することができた。さらに震災より2年6カ月を経た今、専門看護師コースの実習指導を通して、今後のニーズはどのような方向にあるのかを自施設のがん専門看護師や実習生と共に深く考える機会をもつことができた。つまり、放射線看護の専門職はどう棲み分けるのかについてである。

長期に及ぶ復興支援の中で、現在すでにコースを終えた放射線専門看護師は地域活動という重大な役割を担った。ある時は住民の不安に寄り添い、そして指導者として保健師のリーダーとなった。また、そのニーズは地域だけにはとどまらない。多くの看護職が働く医療現場では、被ばく防護全般に関する教育的支援が今まで以上に重要とされている。放射線災害以降、看護職は患者が受ける被ばくとベネフィットを考慮した意思決定を支援することはもちろん、看護職間でも正しい被ばく防護の知識を共有しなければならない状況に置かれている。

さらに、がん専門看護師とがん放射線療法認定看護師の日本看護協会が推奨する役割や特徴を踏まえて考えてみると、前述の専門職と放射線専門看護師はさまざまな面で協働し力を発揮する部分が多い。協働をイメージすると、逆にそれぞれの特性が明確になってくる。具体的に言うと、がん専門看護師ががん患者を全人的にとらえ質の高い看護を提供し、がん放射線療法認定看護師は放射線療法の有害事象ケアを支援する実働部隊となる。そして放射線専門看護師は被ばく医療看護全般に関する専門家として臨床、地域、産業などの領域を横断して広く活動するというようなことであろうか。

これからの放射線看護は、それぞれの専門職が互いの特性を生かしながらコラボレーションするというまさに理想的な専門分化に発展していくに相違ない。